

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ30】

迫り来る包囲網を前に再豹変？ 新戦略？ そして反戦平和活動は！ 労働組合の役職位とは全く関係なくJR革マル派の総帥であり続ける松崎明氏

平成15年11月、四茂野修著『「帝国」に立ち向かう』<副題 動労～JR総連-職場からの挑戦 ->が、「五月書房」から刊行された。副題中の“職場からの挑戦”は、党中央からの評価も高く（革マル派機関紙・誌上には時折、「職場からの挑戦」を読め」「職場からの挑戦」で勉強しろ」趣旨の記述が現れる）、JR革マル派内では“聖書”扱いされている松崎氏の「著書名」である。

著者略歴をみると、四茂野修氏は、「1949年東京都生。68年都立戸山高校卒。76年東京大学文学部哲学科中退。77年国鉄動力車労働組合（動労）中央本部就職。-中略-98年JR総連執行委員。02年同執行副委員長。現在に至る」となっている。

ところで、同書の中で四茂野氏は、【松崎氏の歩み】として自らが作成した模様の次の「松崎明年表」を掲げている。

【松崎氏の歩み】

- 1954年 国鉄入社試験合格（18歳）。
- 1955年 臨時雇用員として松戸電車区に配属。すぐに品川客車区、同東京支区に転勤する（19歳）。
- 1956年 正規の職員になり、尾久機関区に配属。動労（当時は機関車労働組合）加入。ハンガリー事件起きる（20歳）。
- 1957年 新潟闘争を契機に共産党を離党、新左翼運動の創設に参画（21歳）。
- 1960年 安保闘争、三井三池闘争を経験するなか、全国青年活動家会議を招集（24歳）。
- 1961年 動労初代青年部長に就任（25歳）。
- 1962年 三河島事故。動労は青森大会で国鉄労使が設置した事故防止委員会からの脱退を決め、運転保安闘争を展開（26歳）。
- 1963年 運転保安闘争総括の小田原臨時大会で新左翼党派幹部から執行部批判の発言を求められ拒否。その後、中核派・革マル派の分裂で革マル派につき副議長となる。尾久支部委員長就任。尾久・田端統廃合反対第二波闘争で逮捕され、国鉄を解雇される（27歳）。
- 1964年 動労内に同志会・政研が誕生。政研機関誌『労働者の科学』創刊号に「動力車賃金論の一考察」を執筆（28歳）。
- 1965年 動労伊豆長岡大会で賃金闘争をめくり執行部方針に修正動議を提出。反合特認闘争をめぐって革マル派と対立（29歳）。
- 1966年 革マル派が「通告書」を作成し、代表が自宅に押しかける（30歳）。
- 1967年～関東地方評議会事務局長。
- 1969年～東京地方本部書記長。
- 1973年～東京地本委員長。
- 1985年～中央執行委員長。

傍線を付しておいたが、四茂野氏作成(?)の「松崎明年表」では、松崎氏は「21歳で共産党を離党、新左翼運動の創設に参画」「27歳で革マル派を創設、同派副議長に就任」「29歳で反合特認闘争をめぐって革マル派と対立」「30歳で革マル派が（「松崎糾弾」の）「通告書」を作成し、代表が（松崎氏の）自宅に押しかける」となっていて、一見、早くから松崎氏は革マル派から批判を受け、対立し、30歳（1966年）以降は関係が絶たれたかのようになっている。

しかし、この「松崎明年表」は相当なマヤカシ物である。というのは、その数十年後、平成の時代に入ってから【革マル派内重大事件】として、革マル派の教祖・カリスマ議長として創設時から終始一貫党中央に君臨してきた黒田寛一が、自らが党中央へ登用し絶大な権限を与え行動させた「DI」なる人物（全通労働者）を、“肅清”することで、「松崎・JR総連運動路線」への支持表明を行っているからである。

< JR東日本労政『二十年目の検証』203ページから204ページより抜粋 >

民主化の声・声・声・・・

2005.12.22 その30

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (10) ～佐藤正雄氏失踪事件と、さつき会経理偽装問題～



*妻に黙って家を出てから、15日が過ぎていた。大元が、武藤が自宅に姿を現したとの報告を受けた時、思わず舌打ちをした。<生きていたのか。芝居だったのか。人に心配させやがって>生きていて良かったと心底から思えなかった。本音ではあるが、すぐに思い直した。<武藤が自殺したとなれば、オレへの新たな疑惑が組織内外で噴き出すことは目に見えていた。それを説明するのは容易ではないだろう。帰ってきてよかったのだ>武藤が帰ってきたことで新たな心配が生まれた。<警察の訊問に武藤は、『一切、大元は知らないことだ』と主張し続けられるだろうか>大元は側近の一人を呼んだ。「ほとぼりが醒めるまで武藤を入院させよう。監視を付けておけばいいだろう。組織も武藤の家族も健康診断と休養だと言えは納得するはずだ。奴は前から糖尿病を患っていたよな。入院させても、それほど疑問を持たれはしないだろう。秘密裏に手続きをとってくれ」大元の考えは、夫人も鉄道連合の役員たちも、思いもよらないものだった。「大元は尊敬すべき労働運動のリーダーだ。 邪な思いがあるわけがない。武藤の入院も監視体制をとったのも、武藤本人を考えてのことだし、組織防衛にとっても当然だ」誰もがそう思った。・・・如何に優れたリーダーであったとしても、一人のリーダーを絶対視する組織の体質は、もはや、この労組が正常ではないことを示していたが、それに気の付く者はいなかった。鉄道連合の役員会は武藤の入院を確認した。「大元を守ることは組織を守ることだ。とにかく大元を警察の手からまもらなければならぬ」と決定した。“鉄道連合の大元”は“大元の鉄道連合”となっていた。(p.152～153)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【大元(M氏)への申し訳なさから一度は自殺を考え、日本海側の砂丘などを彷徨った武藤(S氏)は、ようやく思い直し、失踪から半月後に自宅に戻った。大元は、警察の訊問に対して武藤が「一切大元は知らないことだ」と主張し続けられるかどうかを危惧し、「“健康診断と休養”を表向きの理由にして秘密裡に入院させよ」と、側近の一人に指示した。鉄道連合の役員会は武藤の入院を確認し、「大元を守ることは組織を守ることだ。とにかく大元を警察の手から守らなければならぬ」と決定した】

失踪して戻ってきた武藤(S氏)の口封じの為、入院させるやり方は彼らの常套手段であるが、怒りすぎた大元(M氏)が一切責任をとらないのは組織としてどうだろうか。また、「大元を守ることは組織を守ることだ」と決定した鉄道連合も狂っている。

一人のリーダーを絶対視する組織の体質が、JR総連にあることは事実だ。もはや、この労組は大元(M氏)の組織になっている。小説と、うり二つのJR総連である。